Hiroshima Journal of International Studies Volume 18 2012

過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり
――― アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質 ―――

中 島 正 博

Community Involvement and Quality of Life with Setouchi International Art Festival

Masahiro NAKASHIMA

Art projects have been staged in Japan since the 1990s. The features of an art project are collaborating works among artists, volunteers, and local residents. By these features, an art project can be a tool of community development. The aim of this paper is to examine whether an art project actually helped develop communities. Seven islands located in the Setouchi Inland Sea, being scarcely populated and rapidly aging communities, hosted the Setouchi International Art Festival and many collaborative art projects were performed. By examining the impact of the art projects on the island communities, it is possible to see how the art projects affected the local people and the communities. A questionnaire survey conducted by Muroi in 2011 and a fact-finding survey conducted by the author in 2011 were utilized to analyze the various impacts and grassroots facts. It was found that the art projects promoted human relationships and community development activities, although they varied depending on the local situations. Based on these analyses, several conditions for staging an art project to enhance community and human wellbeing are pointed out.

はじめに
Ⅰ．先行研究－アートプロジェクトと地域づくり
Ⅱ．二つの芸術祭
Ⅲ．瀬戸内国際芸術祭の地域インパクト
Ⅳ．芸術祭による地域づくりの課題
結論

はじめに

１．背景

現代アートを用いたアートプロジェクトによる地域活性化やまちづくりに昨今注目が集まっている。アートプロジェクトとは、地域の自然環境や都市の市街地をアーティストの作品設置の舞台とする事業であり、美術館のように作品展示と鑑賞のみを目的とするものではない。ここでアーティストは地域住民の了解を取り付け、住民の協力を得ながら制作に取り組む。すなわちアーティストと住民の協働がアートプロジェクトの大切な要素である。

また作品の制作や来客者の対応に際して、地元住民の参加や協力のほかに、地域外からのボランティアの参加を得ることも重要な要素である。つまりアーティスト、地域住民、ボランティアの協力によって実施される点がアートプロジェクトの特徴である。こうした取り組みが、過疎化・高齢化が進んだ地域に多くの若者を呼び寄せ、地域再生につながる動きが各地で生まれつつある。

これまでの地域再生や地域活性化は経済活動との関連で論じられることが多かった。過疎化・高齢化が進行している地域において、産業活動を活性化して若者の流出に歯止めをかけ、過疎化高齢化を緩和することは一つの理想である。しかし経済活動を中心にした活性化を待つのみでは地域の将来は見えてこない。経済活動の活発化は高齢者自身の福祉や生活の質に大きく貢献するだろうか。経済活動を拡大することよりも、地域住民や来訪者との交流や地域貢献の方が、高齢者の福祉や生活の質に資するのではないだろうか。アートプロジェクトによる過疎高齢化地域の活性化が期待される理由である。

アートプロジェクトの事例として知られているのが、新潟県・越後妻有の「大地の芸術祭」である[1]。

キーワード：アートプロジェクト、アンケート調査、過疎高齢化、観光客、聞き取り調査、こへび隊、生活の質、瀬戸内国際芸術祭、大地の芸術祭、地域インパクト、地域活性化、地域づくり、地域ボランティア。

これに引き続く事例として、2010年７月から10月の105日間に瀬戸内海の直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島の７つの島と高松港で「瀬戸内国際芸術祭」[2]が開催された。この芸術祭には予測の３倍に相当する94万人が島々を訪れ、集客規模では大成功と評価された。アートプロジェクトの大切な目的が地域づくりや地域活性化にあることを考慮すると、地域社会に与えたインパクトの継続的な観察が必要である。

２．研究の目的

本研究においては、瀬戸内国際芸術祭が地域住民にどのようなインパクトを及ぼしたか検討する。同様のアートプロジェクトである大地の芸術祭についても、地域インパクトの比較のために検討の対象にする。そして瀬戸内国際芸術祭の開催後一年を経過した2011年に、芸術祭が開催された島の状況を聞き取り調査により把握して、アートプロジェクトを契機にした地域づくりの効果と課題を明らかにする。最終的には超高齢・過疎地域の活性化あるいは新たな地域づくりの可能性を探る。

３．研究方法

第一にアートプロジェクトとは何かについて考察する。アートプロジェクトは新しい社会現象であり発展途上の芸術表現である。アートプロジェクトの特徴は何か、いかなる社会的条件がこのアート活動に求められているのか、なぜそのような芸術表現が盛んになっているのかなどについて、既存の文献により第Ⅰ章で明らかにしたい。特に本稿の中心テーマであるアートプロジェクトと地域づくりやまちづくりの関連に注目する。

第二に近年開催された二つの芸術祭の成果を第Ⅱ章で検討する。新潟県の農村地域を舞台に2000年から開催されている「大地の芸術祭－越後妻有アートトリエンナーレ」を住民の視点から分析した先行研究に注目する。主に勝村ほか（2008b）のアンケート調査結果に基づいて、大地の芸術祭が地域社会にもたらした変化・インパクトについて検討する。
次に「瀬戸内国際芸術祭」の終了後に行われたアンケート調査結果を紹介する。室井（2011）が直島・豊島・女木島・男木島の４島の住民を対象に行ったアンケート調査が有用である。アンケート調査の結果に基づいて、瀬戸内国際芸術祭が４島の地域社会にもたらした変化・インパクトのデータを考察する。

第三に瀬戸内国際芸術祭の舞台になった島の住民に対する筆者の聞き取り調査に基づいて、芸術祭がそれぞれの地域に及ぼしたインパクトを第Ⅲ章で考察する。筆者は７つの島の内、直島、豊島、男木島、女木島、小豆島を2011年８月に訪問して、継続展示の作品を鑑賞し、種々の機会を利用して島の住民と自由な会話によって、芸術祭に関する意見の聞き取り調査を行った。それぞれの島への訪問は夏祭りの日を選び、多くの住民が集まる行事の機会を利用した。

大地の芸術祭も瀬戸内国際芸術祭も同様に過疎高齢化地域が舞台だが、大きな相違点は後者が会場へのアクセスは海上交通に依存することであり、会場になった一つ一つの島の地域社会は固有性が高いことである。それぞれの島は経済的、社会的、文化的な背景が異なるために、芸術祭のインパクトも異なる。従って本稿では室井（2011）のアンケート調査結果と筆者の聞き取り調査結果を利用しながら、直島・豊島・女木島・男木島のそれぞれについて、芸術祭が地域に及ぼしたインパクトを分析し考察する。

最後に芸術祭による地域づくりを効果的にするための課題を第Ⅳ章に述べる。プロジェクトの舞台の地域特性によって効果には差異が生じるが、どのような地域においても共通して重要と思われる課題である。これらの課題に向き合うことは、今後も新潟県の里山や瀬戸内海の島々で継続される芸術祭で、効果的な地域づくりをするために有用ではないだろうか。

Ⅰ．先行研究―アートプロジェクトと地域づくり

アートプロジェクトとは何だろうか。橋本（1997）は1990年代の日本の主なアートプロジェクトを調査して、以下のようにアートプロジェクトの特徴をまとめている。少し長いが引用する。

> アートプロジェクトは一言で簡単に定義しにくい要素を持っているが、共通する要素は「社会とアートの多様な関係をつくりだそうとしていること」「表現活動のさまざまな場面への参加・交流をつくりだそうとしていること」の二つの要素が、アートを鑑賞中心の世界からより広い意味を持つ「プロジェクト」にしている大きな違いである。

そして、最もアートプロジェクトをプロジェクトたらしめているのは、意識されているかどうかはともかく、アートが触媒となって「新たなコミュニケーション」の回路が生み出されていることである。つまり、アーティストの個人的な表現活動として完結しているのではなく、制作されるプロセスや作品との出会いがさまざまな人々との関わりによって成立したり、また表現活動を通して場所に新たな意味を発見させる。そのようなコミュニケーション機能によって表現行為そのものも影響を受ける、かかわる人や場所も変化する、そしてそれらが深く浸透していくなかで、まちにも影響を与えていく。

アートプロジェクトは新たな表現方法として発展途上にあり、筆者が軽々しく定義することはそれを矮小化するだろう。橋本の文章は現在のアートプロジェクトの特徴を言い表していると思われる。この引用には地域づくりとの関連が、「社会」、「コミュニケーション」、「場所にあらたな意味」、「人や場所も変化」、「まちにも影響」などの表現で言及されている。本稿では橋本が述べる上記の特徴をもってアートプロジェクトの定義として地域づくりの可能性を考察する。

アートプロジェクトが「参加」、「協働」、「コミュニケーション」、「結果よりもプロセス」を重視する理由について八田（2004）は考察している。八田は先に引用した橋本（1997）によるアートプロジェクトの特徴に共感を示しつつ、2000年から2002年に行われた「大地の芸術祭2000」や「直島プロジェクト」などを含む、9件のアートプロジェクトまたはそれに類似した事例を調査した[3]。それぞれのアートプロジェクトの特徴に論及した後、八田は「芸術表現が、『場』との関わり、そして『人』との関わりを、強く求めているのではないか」と考える。すなわち芸術表現が「美術館」の外に出た理由として「芸術とは本来もっと原初的な、人間の内から力強く萌え出したエネルギーの発露ではなかっただろうか。‥そのような芸術本来のエネルギーが、『美術館』の束縛を逃れようとするいわば本能的な衝動の表れでもあったといえよう。そしてこのエネルギーは、20世紀末から『アートプロジェクト』の中に流れ込み、より人々に親しいかたちで、まちや里山を舞台として、新たな展開をみせているのではないだろうか」と考えるのである。その理解の上に立てば、アートプロジェクトは地域づくりそのものを目的にしているのではなく、アーティストによる芸術表現の衝動と、その舞台である地域の活性化や人びとの生活というニーズが、交わるところに成立するのだろう。

現代アートによる地域再生の取り組みが、アートプロジェクトとして我が国で増加している。そのような取り組みが地域に新たなソーシャルキャピタルを形成し、地域を活性化させるメカニズが考察されている（野田 2011）。芸術作品の制作と展示に時代の潮流の変化がある。例えばパブリックアートのように作品の「もの」の展示が目的なのではなく、アートプロジェクトは住民とのコラボレーションによる作品制作プロセスの「こと」あるいは「物語」そのものが目的である。

そのアートプロジェクトの特徴として、①芸術作品の制作・展示とそれによる地域再生が目指されている、②アーティストは、アトリエで孤独に作品を制作するのではなく、現地に滞在しながら、住民とのコミュニケーションを通して作品をつくる、③その際、その地域の歴史や固有の文化が制作上の重要なファクターとなること[4]を野田は挙げている。アートプロジェクトにはコミュニケーションが不可欠である理由として、我が国の地域におけるコミュニティの衰退とそれにともなうコミュニケーションの低下を指摘し、住民同士のコミュニケーションを活性化することの重要性を論じている。それがコミュニケーションとしてのアートが評価されるようになった背景であると野田は考える。

上記の①②③は地域に新たなソーシャルキャピタルを形成するプロセスになる。すなわち「アーティスト達が地域にやって来て住民とコミュニケーションをとりながら作品を制作する過程で、アーティストと住民のあいだ、住民と住民のあいだなどに『社会的ネットワーク活動』が生まれる。その協力関係の構築はお互いの『相互信頼』を形成し、アーティストの地域での活動に対する住民の共感が『互酬性』を生む」のである。大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭では、このようなプロセスによって、第Ⅱ章で後述するように芸術祭の成果として人びとの交流が生まれ、地域づくりの活動が活発になっている。

地域づくりのテーマは地域の意味を見直す試みでもある。西田（2008）は大地の芸術祭（妻有）や直島の現代アートが風土性を強く表していることを指

摘し、「風土性は自然・歴史・文化からなる土地の意味でありおもむきである」と論じている。また「妻有と直島の現代アートは、風土と過去を活かし、それらとの連続性を志向している。…来訪者は妻有と直島を巡るとき、中山間地域と島嶼の風土と過去を見つめ、これらを破壊してきた20世紀の文明とは何であったかを考えずにはいられない。妻有と直島の現代アートの風景は20世紀の文明を問いなおす風景といえよう」と述べている。農村や島嶼を切り捨ててきた現代文明の反省に基づいて、私たちは過疎高齢化の地域の将来を考えるよう求められる。

さらに西田（2011）は瀬戸内国際芸術祭の離島を巡るアートツーリズムについて論じている。離島への「アクセスの不便さと島の狭さが入島制限として働き、ユースコントロールを実現した。ここではははからずも持続可能な観光の先取りがあったと指摘できる」としているが、本稿の第Ⅱ章でも紹介するように、島の住民に混雑の不便を強いた事実は、持続可能な観光を実現したとは言えない。また「地域独自の魅力を生かした体験型・交流型観光へのニーズが高まっており、新たな旅行需要の創出による地域の活性化等のため、地域密着型のニューツーリズムの促進は極めて重要である」との観光立国推進基本計画（国土交通省 2007）を紹介して、「国際芸術祭は地域資源を生かした地域密着型のニューツーリズムの実践であった」と西田は評価している。

最後にアートプロジェクトの評価について言及したい。アートプロジェクトはさまざまな助成金によって支えられる。企業は社会貢献活動やメセナ活動を行っており、企業の助成団体はそれぞれの評価基準によって支援するアート活動を選んでいる。アートプロジェクトを積極的に助成しているある団体の評価基準は、「未来」、「市民」、「地域」であるという（加藤 2010）。すなわち「新しい市民社会をつくり出すことです。そのプロセスとしてアートによるコミュニティの再生が必要」であると考え、「コミュニティをつくり出す、あるいは再生するための物語を、アートの力によってどのように発掘できるかが、われわれにとっての一番重要な評価基準です」[5]との立場である。そのような評価基準は、本章の先行研究の冒頭で明らかにした、「アートプロジェクトとは何か」に対する回答に沿ったものである。そして本稿の芸術祭による地域づくりのテーマと一致するものである。

先行研究に関する以上の文献レビューにより、アートプロジェクトとは何かを明らかにし、これまで実施された幾つかのアートプロジェクトについて、それらの特徴と共に地域づくりとの関連も確認した。しかしながらアートプロジェクトの多くの評価は定性的であり、定量的な評価はまだ数少ない。特に地域社会に対する影響はあまり評価されてこなかった（勝村 2008）。2000年から開催されている大地の芸術祭や、2010年に初めて開催された瀬戸内国際芸術祭はアートプロジェクトで構成されおり、芸術祭が実施された直後に、地域社会への影響に関する定量的評価が可能なアンケート調査が行われた。第Ⅱ章ではその二つの芸術祭が地域づくりに及ぼした影響について検討する。

Ⅱ．二つの芸術祭

本章では大地の芸術祭と瀬戸内国際芸術祭が地域づくりに及ぼした効果を具体的に検討したい。アートプロジェクトが地域社会に及ぼす影響や効果を定量的に調査した研究は多くない。大地の芸術祭と瀬戸内国際芸術祭の二つの芸術祭が、それぞれの地域社会に及ぼしたインパクトに関してアンケート調査を実施した研究を利用し、地域インパクトを検討する。

１．大地の芸術祭

大地の芸術祭（妻有トリエンナーレ）は2000年から2009年まで３年ごとに1回、継続して開催されている。第４回の2009年の芸術祭の終了後、芸術祭の主催団体によって、作品設置集落や町内の代表者に対してアンケート調査が行われた（北川 2010a）。その調査結果を表１に示す[6]。この第４回の作品展示集落数は92集落、アンケート対象者は80人、回答者は64人であった。

アンケート回答者は一般住民ではなく、集落や町内代表者である点に留意しておく。作品が設置されて「良かった」ことの評価が最も高いのは、「作家やこへび隊など外部の人との交流」である。ここで「こへび隊」というのはこの芸術祭をサポートするボランティア団体であり、主に若者が都市圏から参加する[7]。また次に同様の高い評価は「作品鑑賞者が多く訪れ、地域の賑わい」が生まれたことである。そして「地域内の人間関係」が深まり、「地域

表１　大地の芸術祭主催者による住民代表者に対するアンケート調査結果　（%）

■作品が設置されてよかったと感じているのは、どんなことですか	
・作品制作作業などを通して、地域内の人間関係が深まった	35
・作品制作作業などを通して、地域内の活動が活発になった	29
・作品制作作業などを通して、作家やこへび隊など外部の人との交流が生まれた	65
・作品設置により地域内の文化環境が豊かになった	10
・作品鑑賞者が多く訪れ、地域に賑わいが生まれた	63
・作品設置に関連して、地域内・地域周辺の道路や駐車場などインフラが整備された	8
・その他	2
■作品が設置されて良くなかったと感じているのは、どんなことですが	
・作品制作作業などのために、地域内の人間関係に不和が生じた	30
・作品制作作業などのために他の地域活動が停滞した	10
・作家やこへび隊など外部の人が地域に入ったため、地域に混乱が生じた	0
・作品の設置により地域内の景観が乱れた	10
・芸術祭来訪客のマナーが悪く、地域が迷惑を被った	20
・芸術祭来訪客のマイカーやツアーバスが混雑し、地域住民の交通に支障をきたした	40
・その他	20
■大地の芸術祭を継続開催しほしいと考えていますか	
・ぜひ継続開催してほしい	18
・どちらかといえば継続開催してほしい	52
・どちらかといえば事業を終了してほしい	28
・ぜひ事業を終了してほしい	2

出典：北川（2010a）のデータをもとに筆者が作成

の活動」が活発になったことである。

これらから特に地域外の人びととの交流、つまりボランティアなど若い人との交流が地元の住民に高く評価されていることが分かる。また地域内の人間関係が深まったことの評価も踏まえると、「交流」や「人間関係」が地域の人びとの生活の質に貢献していると思われる。アートプロジェクトは作品そのものよりも、作品を制作するために作家、ボランティア、住民が協力するプロセスに意味がある。それが地域に活気を生みまちづくりに貢献する。アンケート結果からはアートプロジェクトの大事な目的が達成されたことが分かる。

逆に「良くなかった」ことの最大は地域住民の交通混雑であるが、それは高評価の「地域の賑わい」の裏返しの現象でもある。従ってプラスの効果を維持しながらも、マイナスの現象を最小限に止める工夫が求められている。また「良くなかった」ことの二番目は「地域内の人間関係に不和が生じた」ことであるが、これも作品制作作業などを通して「人間関係が深まった」ことが裏目に出た現象であろう。人間関係が深まって良かったことも、悪かったことも両方が生じるのは、人間社会で避けられないかも知れない。「良くなかった」ことの三番目は「来訪客のマナーが悪く、地域が迷惑」を被ったことであり、やはり良かった「地域の賑わい」に伴うマイナス面である。賑わいを実現しながらもマナーを改善することが求められる。

以上のことから、アートプロジェクトの効果として住民を中心とした地域づくりに、芸術祭が貢献したことが分かる。しかしながら賑わいや人間関係の深まりに伴うマイナス面があることも明らかになった。交通混雑やマナーの悪さは主催団体の努力によって、ある程度改善できる。また人間関係の深まりによるマイナス面も、芸術祭を続ける過程の経験や試行錯誤によって、作品制作作業における好事例が増え改善できる可能性がある。

松本他（2005）と勝村他（2008a、2008b）は「大地の芸術祭（妻有トリエンナーレ）」を事例にして先進的な調査を行った。松本他（2005）はアートプロジェクトを支援した集落の区長を対象にインタビュー調査を行った結果、地域住民によるアートプロジェクトへの参加を通して、地域住民の間にソーシャルキャピタルが形成されたことを確認した。高齢者の参加や外部との交流などのネットワーク構

築、またアートプロジェクトがもつ住民参加を促進する特徴、などがソーシャルキャピタルの形成に寄与している。

さらに勝村他（2008b）は「芸術祭が地域にもたらした具体的な変化」を明らかにするためにアンケート調査を実施した。アンケート調査は2000年、2003年、2006年の各芸術祭開催において、作品が設置された66集落の住民を対象とする悉皆調査である。アンケートの配布数は3,235世帯で回答数は2,320世帯であった。集落の規模は１集落当たり５世帯から450世帯と大きなばらつきがある。芸術祭が地域にもたらした具体的な変化として表２に示す結果を得ている。

具体的な変化はないとの回答が半数以上である。望ましい変化として、「寄り合いの回数」、「地域の行事」、「行事への参加者」、「地域の活気」などが増大したのは回答数の20～25％前後、「地域での話題」が増えたのは42％であった。芸術祭は望ましい変化をもたらしたことが分かる。地域の話題の増大は、人間関係が希薄化する現代社会の中でコミュニケーションを促進し共感が生まれ、芸術祭の開催地としての地域アイデンティティに寄与する可能性を示す。

これらの好ましい変化が起きた原因は、アーティストの熱意20％、こへび隊（ボランティア）[9]の熱意16％、地域の熱意14％、作品自体のよさ13％、来場者からの評価９％、行政担当者の熱意６％である。アーティストやこへび隊など地域外の人びとの影響が比較的大きい事実に注目したい。過疎高齢化に悩む社会が地域外の若い人びとにより活性化されている。アートプロジェクトはアーティストにボランティアや地域住民が協力して作品を制作するプロセスを大切にする。アーティストやこへび隊の熱意が地域に変化をもたらした理由である。さらに、こへび隊が地域住民とのあいさつや交流を大切にしていることも地域社会に好影響を及ぼしている。

表２　芸術祭が地域にもたらした具体的な変化　（％）

評価項目	増加	変化なし	減少	無回答
寄り合いの回数	25	57	0	17
地域の行事	26	57	1	16
行事への参加者	22	58	2	18
地域のまとまり	14	68	1	16
地域での話題	42	44	1	14
地域の活気	25	59	1	15
地域内でのもめごと	2	78	4	16
地域内での女性の活躍	19	65	1	16
地域内での高齢者の活躍	18	66	1	16
地域の雰囲気	18	64	2	17

出典：勝村他（2008b）のデータをもとに筆者が作成[8]

大地の芸術祭の主催団体によるアンケート調査と勝村他によるアンケート調査を比較すると、芸術祭の最大のインパクト効果は、地域の内部や外部の人びととの交流の活発化であることが明確に分かる。アートプロジェクトにおいても地域づくりにおいても、プロジェクト関係者や住民のコミュニケーションが不可欠の条件であることを考えると、芸術祭は少なくとも人づくりの側面から地域づくりに貢献している。課題はそのコミュニケーションが定着し持続することであろう。

２．瀬戸内国際芸術祭

2010年の「瀬戸内国際芸術祭」の終了後、芸術祭の主催団体によって、作品を設置した島の住民[10]を対象にアンケート調査が行われた（北川 2011）。回答数は513人である。その調査結果を表３に示す。

芸術祭への「期待」と、「成功」か否かに関する回答から分かるのは、期待していたより結果は良かったということである。「開催後」の評価はポジティブな回答が合計して82％である。「次回の開催」については、開催したいという回答は84％である。全体的には「開催前」にネガティブな32％の印象が、「開始後」には７～18％に減少している。このアンケート調査では全体的に大変良い評価が得られたと言える。しかし会場になった個々の島ではそれぞれの事情を抱えており、このアンケート調査にはその事情が表れていないので、今後の地域づくりのために直接に役立つ結果ではない。

室井（2011）は瀬戸内国際芸術祭が終了した後、芸術祭の文化事業としての側面と地域づくり事業としての側面の評価をするために、直島・豊島・女木島・男木島の住民を対象にアンケート調査を実施した。本稿では後者の地域づくりに関する評価の結果を紹介する。室井は大地の芸術祭のアンケート調査をした勝村他（2008a）の調査項目を参考にしており、両者の調査には共通点があるので、二つの芸術祭の地域インパクトの比較を行いやすい利点がある。

瀬戸内国際芸術祭のアンケート調査のサンプル

表３　芸術祭主催者による住民に対するアンケート調査結果

（%）

■芸術祭開催前の期待		■開催後の評価	
・大いに期待していた	26	・大いに役立った	36
・少しは期待していた	43	・少しは役立った	46
・あまり期待していなかった	25	・あまり役立たなかった	13
・まったく期待していなかった	7	・全く役立たなかった	5
■今回の芸術祭は成功だったか		■次回の開催をどう考えるか	
・大成功だった	49	・ぜひ開催してほしい	46
・まあまあ成功だった	45	・どちらかといえば開催してほしい	38
・あまり成功ではなかったなかった	5	・どちらかといえば開催しないでほしい	13
・失敗だった	2	・開催に反対	3

出典：北川（2011）のデータをもとに筆者が作成[11]

表４　芸術祭が住民にもたらした具体的な変化

（%）

質問項目	直島	豊島	女木島	男木島
多くの観光客が訪れて活気がでた	81	85	68	87
島に経済効果がもたらされた	72	54	30	71
島外の人々と交流することに関心が高まった	46	65	55	84
自分の島に対する愛着が強まった	61	73	66	82
住民による島づくり活動が活発になった	61	53	27	66
芸術祭で知り合った人がいる	26	44	46	79
全体的に芸術祭が島に好ましい変化をもたらした（そう思わない）	33（21）	56（6）	30（23）	77（5）
次回も自分の島で芸術祭を開催したい（したくない）	22（25）	64（2）	48（9）	74（5）

出典：室井（2011）のデータをもとに筆者が作成

は、大地の芸術祭のように悉皆調査ではなく、女木島を除いて選挙人名簿あるいは電話帳から無作為抽出した、各島それぞれ直島300人、豊島150人、男木島50人、女木島44人であり、回収率はそれぞれ88%、57%、76%、女木島の回収率は不明である。2006年の島の人口はそれぞれ3,397人、1,185人、232人、236人である。

大地の芸術祭の調査結果はすべての集落を合計した回答結果が示されたが、室井の調査では地域（島）ごとに回答結果が集計されている。調査した４島のそれぞれ異なる地域性が調査結果の地域（島）別のデータに表れており興味深い。

質問項目に対して４島に分けた回答の割合を表４に示す。表中の最初の５項目は、「大いにそう思う」と「まあそう思う」の回答の割合を合計した数字である。最後の３項目には「まあそう思う」の回答が用意されておらず、選択する回答は、知り合った人がいる/いない、変化をもたらした/そうおもわない/どちらともいえない、開催したい/したくない/どちらともいえない、などからの選択である。

室井（2011）によるこのアンケート調査結果は、筆者がそれぞれの島で聞き取りにより得た内容からよく理解できるものである。アンケート調査結果について各島の比較で目立った特徴を以下に述べる。それらの特徴が表れた理由については、第Ⅲ章の各島の地域インパクトの説明で述べる。

質問項目と回答を全体的にみると男木島の割合がすべて大きいことがわかる。個別の質問をみると、「島の活気」については、すべての島に観光客が訪れて活気がでているが、女木島の割合が相対的に低い。男木島では「大いにそう思う」の回答内訳の割合（63%）の大きいことが目立っている。「島に経済効果」については、直島と男木島で大きく女木島で低い。直島には民宿や飲食店が増え、男木島では連合自治会が中心になり、観光客をもてなすサービスを提供した経済効果があった。

「島外の人々と交流する関心」は男木島で大きく直島で小さい。その主な要因は作品展示の場所と方法である。直島の作品は主に美術館の展示と古民家の「家プロジェクト」[12]であった。男木島ではコンパクトな集落空間の中に作品が展示してあり、島外の人々と島の住民が交流する機会が多かったのである。

「自分の島に対する愛着」はすべての島で強まっ

た。芸術祭によって全国および世界から観光客が来ることは多くの島民にとって喜ばしい。過疎化している状況にも拘わらず、島が注目されることは島民の誇りであり、自分の島に愛着が深まるのは自然である。直島は芸術祭以前から美術館や家プロジェクトが観光客を集めていたので、芸術祭そのものによる愛着の増大という変化は他の島に比較して小さかったのかも知れない。

「住民による島づくり活動」が活発になったのは、女木島で少なく男木島で多い。男木島では男木の連合自治会が中心になり、観光客の受け入れ態勢を整備する活動が行われたことが島づくり活動にもなった。女木島で活動が少ないのは、女木の連合自治会が芸術祭にあまり関与しなかったことが理由であろう。

「芸術祭で知り合った人がいる」のは直島で小さく他の島で大きい。その主な理由は先の島外の人々との交流の関心の大小の理由の説明と共通する。すなわち島の人口規模や集落の広がりが大きい直島では、知り合った人の割合は小さくなる。美術館と家プロジェクトによる作品展示が中心の直島と、コンパクトな集落でこえび隊や地域住民が協力するアートプロジェクトが中心の豊島・女木島・男木島の特徴が表れた結果である。

「全体的に芸術祭が島に好ましい変化をもたらした」と回答した住民は、直島と女木島で比較的少なく男木島で多い。その一つの理由は、経済的に豊かな直島では、住民の雇用が保障されており、芸術祭は住民の生業に影響を与える存在ではないが、過疎化・高齢化している男木島には雇用を支える産業が少なく、人口200人の半数以上は年金生活者や高齢者で占められており、芸術祭は住民に大きなインパクトを与える出来事なのである。

芸術祭が島に好ましい変化をもたらしたと思わない回答は直島21％であり、女木島で23％である。女木島の経済状況は男木島と似ているにも関わらず、芸術祭の影響について肯定的ではない回答が男木島や豊島よりも多い。その理由は次章で考察する。

「次回も自分の島で芸術祭を開催したい」と思う直島住民は22％であり、女木島では48％である。2010年の芸術祭は女木島住民にとって、男木島ほど肯定的ではなかったが、社会経済状況の似ている男木島と同様に、次回の芸術祭に期待したいとの願望があると思われる。他方、直島で次回も芸術祭を開催したい住民が22％に止まり、開催したくない住民が25％に上る調査結果は何を物語るのだろうか。芸術祭が行われた７つの島の中では、「アートの島」として最大の魅力を放ち、最多の観光客が訪れた島なので、次回の開催に関する島民のこの反応の原因を見極める必要がある。

３．二つの芸術祭のインパクトの比較

先に紹介した大地の芸術祭と瀬戸内国際芸術祭の住民アンケート調査結果は単純に比較できないが、明らかな差異や共通点を見出すことはできる。大地の芸術祭の表２で、地域活動が活発になったこと、交流が生まれたこと、賑わい（活気）が生まれたことの高い評価は瀬戸内国際芸術祭の表４でも同様である。また逆に表１の来訪客の混雑で迷惑が生じたことは、表４には示されていないが、瀬戸内国際芸術祭でも実際に起きていることは筆者の訪問や聞き取りにより分かっている（第Ⅲ章を参照）。

表２の大地の芸術祭では、「地域に好ましい変化」があったのは、回答数の20～25％程度であったのに対して、表４の瀬戸内国際芸術祭では30～80％程度である。共通の質問として「地域の活気」を比べると前者では25％であり後者では平均すると80％である。「知り合いの獲得」を比べると、前者では24％であり後者では平均で49％である。両者ともに好ましい変化はあるものの、このように瀬戸内国際芸術祭の方が全体的に地域にプラスの効果が大きくなっている。

何がこれらの差異の原因だろうか。前者の悉皆調査と後者の抽出サンプル調査という方法に原因があるとも思えない。大きな違いは、前者は新潟県の広大な農村が舞台であり、後者は瀬戸内海の小さな離島が舞台である。いずれも過疎高齢化社会であり、前者の高齢化率は25％であるが、後者の島々はすべてそれを大きく超えており、最高は女木島・男木島の60％である。後者の深刻な高齢化の危機感が住民の意識を高めたかも知れない。また自由時間の長い高齢者が多いので、住民による作品制作協力や作品鑑賞に係わる時間にも恵まれている。つまり芸術祭に係わる時間的な余裕があるのかもしれない。また離島という地理的条件[13]が、芸術祭による地域づくりインパクトが大きかった理由かもしれない。

次に「新しい知り合いの種類」は大地の芸術祭の場合、アーティスト16％、こへび隊11％、来訪者

5.9％となっている（無回答53％）。他方、瀬戸内国際芸術祭の場合、男木島、女木島、豊島ではアーティスト、こえび隊、来訪者はそれぞれ三分の一程度ずつほぼ同じ割合であり、後者の方が新しい知り合いを得た割合は大きい。こえび隊の活動がほとんど無かった直島は例外的であり71％が来訪者である。大きな差異は、大地の芸術祭では来訪者と知り合うことが比較的に少なく、瀬戸内国際芸術祭では多いことである。これは大地の芸術祭と比較して、島では人口と作品が狭い地域に集中していることが理由であろう。

Ⅲ．瀬戸内国際芸術祭の地域インパクト

2010年に開催された瀬戸内国際芸術祭の会場になった島（□で囲み）を図１に示す。７つの島のうち直島、豊島、女木島、男木島の人々の率直な意見を聞いた。先ず島の人々が集まる夏祭りに筆者が参加し、夏祭りに参加していた住民に自由に話しかけて、芸術祭について感想を聞いた。また島で出会う人びとと会話の機会を見つけて、一般の住民の声に耳を傾けた[15]。多くは特定の質問項目を用意した聞き取りではなく、芸術祭の感想を聞くことから始めて、住民の「問わず語り」に触発された筆者の質問をはさみながら、インフォーマルな自由な会話を進めた聞き取りである。

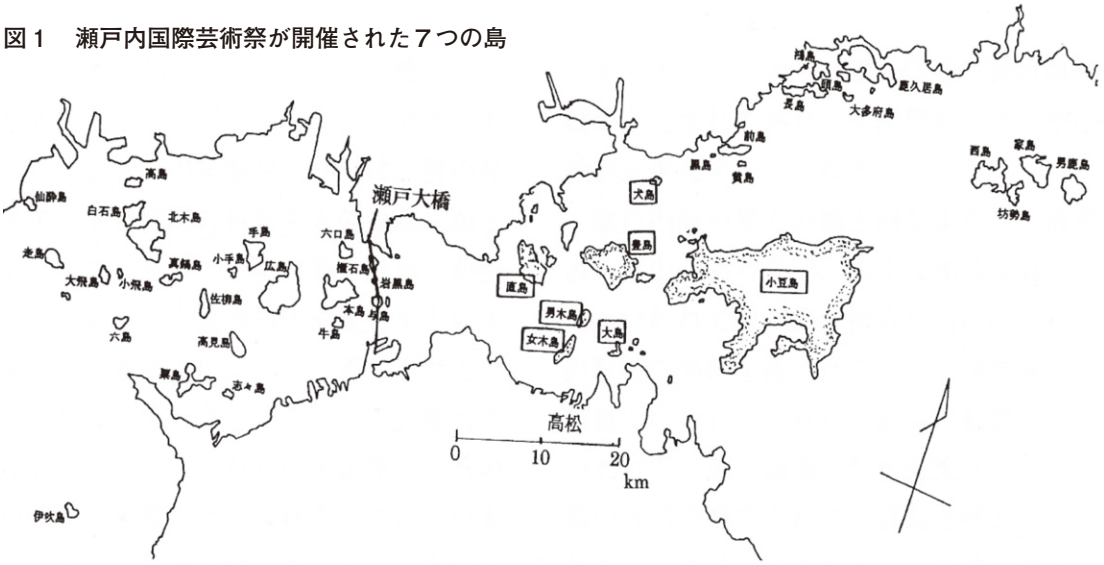
2011年８月に行われる夏祭りの日程[16]を調べて各島を訪問した。さらに2011年11月には直島町を訪問し聞き取りを行った[17]。表５にインフォーマルな聞き取り調査を行った対象者の人数と属性を示す。なお女木島と男木島は距離的・行政的に近く、聞き取り対象者から両方の島の話を聞くことができたので、敢えて島と人数を区別していない。聞き取りの対象者として結果的に男性高齢者が多くなったのは、筆者が話しやすかったことが原因である。

それぞれの島について聞き取りの内容を整理して以下に紹介する。複数の住民から同様の話を聞いて共通認識と思われたことを中心に記述する。従って記述には属性を付していない。それぞれの島には特有のインパクトがあるので、聞き取り内容は必ずしも島ごとに共通しておらず、それぞれの島に特徴的な内容を記述した。地域へのインパクトの説明と共に、室井（2011）のアンケート調査結果の背景にも言及する。聞き取りにはアンケートの調査結果を現場で確認する内容が多くあった。

１．直島

直島の人口は3,325人（2010年）、高齢化率は28％（2005年）である。直島には三菱マテリアルの精錬所が立地しているために、雇用機会は豊富で他の島と比較して経済的に豊かである。高卒生は希望すれば三菱に就職できる。島内の労働力人口は不足しており、岡山の玉島から直島の三菱に通勤する社員もいる。人口の約十分の一が三菱の雇用であり、

図１　瀬戸内国際芸術祭が開催された７つの島



出典：岡市（2009a）

表５　インフォーマルな聞き取り調査の対象者の人数と属性

	20代		30代		40代		50代		60代		70代	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
直島	1		2	1	2	1	1		5	2	1	
豊島			2				1	2	1	1	1	
女木島 男木島					1				2	4	1	

出典：筆者作成

その他に三菱の関連会社の雇用も多い。聞き取りで話した高齢者は殆ど三菱の退職者あるいはその家族であった。経済的に安定しているので「一般の住民は島内で行われる島外企業のアート活動や芸術祭にさほど関心はない」と言う。

「直島の住民は島にくる客に親切であり開放的であり、それは島民の文化である」。そして「島民は人びとの絆を財産と考える」。その絆は昔ほど強くはないが、緊密な絆を息苦しく感じる島民もいる。コミュニティ意識は強く自治会の加入率は100％である。「過去５つの自治会が別々に夏祭りをしていたが、現在は合同で行う」ようになった。「直島住民はほぼ皆が知り合い同士である」と言う。知り合い同士であるから親切は当たり前なのである。その結果「時には過剰な親切もある」。歩いている芸術祭の客を車に乗せることも多く、それは島の文化から自然に生まれる親切である。

直島の南側で1980年代末頃から行われていた、アート関連の企業活動[18]に町民の関心は無かったが、居住地域である本村地区の古民家で1998年から始まった「家プロジェクト」に、その古民家の近隣の住民が協力するようになった。「アーティストの熱心な制作活動に共感した」からである。住民の協力は次第に広がって、家プロジェクトのボランティアガイドまでするようになった。「家プロジェクトを訪問する客が増えたため、地域住民の誇りが高まり訪問者の目を意識して」、住民は町を自ら綺麗にするようになった。民家の「のれんプロジェクト」もその一つである。アートプロジェクトで伝統への関心も高くなり、本村地区の住民の記憶にある屋号の地図を作成し、屋号をアートの表札にして、それを各自の家に飾るプロジェクトが実施された。これも家プロジェクトの一環である[19]。

アンケート調査の経済効果では直島が比較的大きな割合を示している。直島には民宿や飲食店が増え、４島の中で最も多くの観光客が訪れたので、観光用の物品販売も好調で直島町は経済的に潤った。しかし直島の人口は比較的大きいので、芸術祭による経済効果で直接潤った人口の割合は小さい。

アンケート結果から分かるように「島外の人々と交流する関心」は直島で小さい。直島では芸術祭に来島した観光客と住民の交流は少なかった。それは比較的大きな島の中で、観光客の訪問先が非居住地区の島の南側の美術館地域と、入場は午後4時半までに制限されている家プロジェクト地域に集中することが大きな理由である。家プロジェクトは居住地区にあるが、会社勤めの住民が留守の時間帯に観光客が来て帰るのである。また美術館に展示される作品制作に、住民がアーティストと関わり交流する機会はない。また家プロジェクトの多くは本村地区の周辺に集中しており、それは直島全体の一部なので、直島島民全体にとっては、島内や島外の人々と交流する機会が少ないのである。

「自分の島で芸術祭を開催したくない」とのアンケート回答が直島で目立って多かったのはなぜだろうか。住民と観光客の交流が少なかったことに加えて、住民は「交通機関や道路や飲食店が非常に混雑する観光の大きな負のインパクトを被った」。住民は客に対して「最初歓迎ムードであったが、次第に住民から苦情が増えるようになった」。若い世代の観光客は７月から９月に集中し、マナーの悪い年配の観光客が10月に集中する傾向が見られた。

筆者の聞き取りで、「芸術祭は個人的には迷惑ばかりだった」、「芸術祭はもう必要ない」と話す住民がいたのは、４島のうち直島のみであった。そのような負のインパクトが「自分の島で芸術祭を開催したくない」との回答に繋がったのである。これらの観光の負のインパクトの他には、直島が企業城下町であり、多くの住民は経済面では観光客を必要としないことも、「自分の島で芸術祭を開催したくない」と回答した理由であろう。

もし住民と観光客の交流がより盛んであれば、観光客の良いマナーが期待できたかも知れないと筆者は考える。なぜなら周りに住民が見えない時、観光客は地元への配慮を忘れて、無遠慮になりがちだからである。日常生活を維持したい住民と、イベント時期に集中する観光客の共存が最大の課題である。訪問先の地域住民とその生活を尊重する観光文化が

求められる。

２．豊島

豊島の人口は1,185人（2006年）、高齢化率は44％（2005年）である。一般に島は水が不足しがちであるが、豊島には多くの溜め池があり、島にしては珍しく水が豊富である。山の上の方にも棚田があり、過疎高齢化で耕地は減ったが、本来の農業生産力は大きい。周辺の海の幸も豊富である。

その豊かな島にかつて産業廃棄物が不法投棄された。豊島住民438名が産業廃棄物の撤去などを求めて、1993年に公害調停の申請を申し立てた後、2000年に調停が成立した。産業廃棄物は豊島から直島に搬出され、香川県直島環境センターで現在処理されている。計画の2013年までに処理を終える努力が続けられているが、廃棄物が新たに発見されたために処理量が増え、期限内の処理完了は困難と予想されており、引き続き国の支援を求めている段階である。このように「豊島の最大の課題である廃棄物処理問題を現在も抱えているために、芸術祭に十分な力を注げなかった」ことを理解しておく必要がある。

作品は主に３つの集落に配置された。豊島での聞き取りでは、芸術祭関係者の中でも特にこえび隊と住民との交流の効果が目立った。豊島の田園風景は実にのどかであるが、芸術祭関係者は島の平穏を乱す言わばよそ者である。ところが住民が田園を歩いていると、こえび隊と出会い、挨拶を交わし、会話ができる。そのような交流が増えるに従って、住民がこえび隊に「車に乗せてやろうか」と言う、親切心が芽生えてきた。また筆者が参加した盆踊りの行事にはこえび隊も参加しており、島の人びとに喜ばれていた。過疎高齢化が進む島に若い人が入って、住民と交流することは島の社会的な活性化である。経済的な活性化よりも精神的な活性化の方が大きなインパクトがある。

食の豊かな豊島では「島キッチン」[20]が大事なプロジェクトである。島民の間でも島キッチンや芸術作品などの話題が生まれる。それは島民の間の「コミュニケーションを促進し」、アンケートの「島に活気がでた」との回答が豊島で多いように、島が芸術祭で賑わうのは喜ばしい[21]。客が島に来てくれるのは良いが、他方「町が騒々しくざわざわするのは嬉しくないお年寄りもいる」。

島キッチンでは地元住民がこえび隊と一緒に働いており、「住民の小遣い稼ぎになる」ことも喜ばれている。島では収入の機会が乏しいので、地元の人に「芸術祭の手伝いをもっとさせて欲しい」との希望がある。民宿や飲食店など客の受け入れ態勢を整えることで、さらに経済効果を生む余地があるだろう。

観光客に対する作品の案内に関して不満を持つ住民がいる。「作品巡りの道案内が不十分なため、客が道に迷って歩くので、農作業に支障が生じる」。それを回避するために、「通行を避けて欲しい道を住民から事前に聞いて、作品巡りのルートを決めて欲しい」という希望がある。観光客が多く小さな道が混雑するので、地元住民の日常生活との摩擦を避ける配慮が必要である。住民の生活空間や文化を尊重する姿勢が芸術祭主催者にも必要である。

芸術祭については住民の間に様々な意見や評価が混在している。上述した好ましい評価がある一方、芸術祭のあり方に関する厳しい意見もある。例えば「芸術祭の美名の裏に商業主義」の側面を危惧する住民もいる。また「島に持ち込まれた芸術作品のみではなく、もとからある島の暮らしや自然などにも注目して欲しい」、という気持を表明する住民は多い。芸術祭ではアートプロジェクトに特有のサイトスペシフィックな作品により、それぞれの土地や文化を活かす手法が採られているが、「客を乗せたバスの巡回路が作品の設置場所に限られている」ために、地元住民がこのような気持を抱くのは理解できる。瀬戸内海の島を舞台にした芸術祭は初めての試みであり、住民の間にさまざまな評価が生まれるのは自然である。

３．女木島

女木島の人口は197人（2010年）、過疎化高齢化が著しく、女木島と男木島を合わせて高齢化率は60％を超えている（2009年）[22]。「女木島と男木島は人口規模、過疎化、高齢化において同じような傾向を辿っている」。農業で生計を立てることは難しい。「過疎化する前は山の上まで畑が広がっていたが」、現在は島のほぼ全体が森林に覆われている。「漁業にわずかの後継者がいるものの」、高齢化によりその将来は危ぶまれている[23]。

女木島は行政上は高松市に属し女木コミュニティセンター（公民館）がおかれている。小学校のみ存在するが、児童がいないので現在休校している[24]。

女木島は桃太郎伝説の鬼ヶ島の愛称で知られ、高松から海水浴客が訪れる。港にはフェリー待合観光施設の「おにの館」が設置されている。女木の集落を見て回ると、過疎化を象徴する空き家や廃屋の存在が目に付く。

島の行事は文化祭、運動会、敬老会、料理教室、ウォーキング、消防訓練、ソフトバレーボール大会、歩け歩け大会、住吉神社大祭りなど数多い[25]。しかし夏祭りの参加者や自治会役員などからの聞き取りによると、「自治会活動に住民が自発的に参加しにくい」状態に陥っている[26]。それはアンケート結果にも表れており、「住民による島づくり活動が活発になった」と回答した割合が４島で最も低い。さらに「経済効果がもたらされた」および「次回も自分の島で芸術祭を開催したい」と回答した割合も比較的低く、芸術祭による地域づくりの効果が他の島に比べて全体的に低い。このようなアンケート調査結果は、自治会活動への自発的な参加の低調と関連があるのではないか、と筆者は推測する。

しかし女木島のアンケート調査結果によると「多くの観光客が訪れて島に活気がでた」と回答した割合は８つの質問の中で最大である。この回答は芸術祭以前の女木が、自治会活動の低調に見られるように、活気が逆に沈滞していたことを示すのかも知れない。アンケートの他の質問の回答から分かるように、持続的な島づくりの効果は女木で高くないが、芸術祭の関係者や観光客の来訪によって、島には活気がもたらされたのである。

住民の聞き取りによると、「島に多くの人が来てくれたことが嬉しかった」のである。それは過疎化の真っ直中にある住民の自然な気持であろう。芸術祭の作品の場所や道に迷う観光客に対して道を教えることが多く、それも住民の「精神的な張り合い」になった。また観光客がポイ捨てするゴミを住民が「自転車で拾い回った」経験は、多くの客が来る島をきれいにしたいという、島に対する住民の愛着や誇りの表れである。

過疎化を打開する効果を芸術祭に期待する住民もいる。「過疎で火が消えそうな島に蝋燭の火を付けてもらった」という声に、深刻な過疎化地域に生きる住民の気持ちが表れている。「過疎化を打開するには芸術祭を３回位開催する必要があり、さらに目に見える離島振興策[27]も一緒に行政が行う」ことを住民は望んでいる。例えば島民が最も喜ぶのは、高松との往復に要するフェリー運賃の低減である。生業としての産業がない住民へ、何らかの恩恵が芸術祭と共に島にもたらされることが望まれている。

行政は自助や共助で島民による「活性化」を求めるが、高齢化で活力が低下した住民の気持からみると、その「活性化」の掛け声に現実的な響きはないようである[28]。経済の活性化なのか、コミュニティの活性化なのか、生活者として精神的な活性化なのか、超高齢化社会の活性化や「生活の質」とは何か考えなければならない。

こえび隊のボランティア活動が芸術祭後にも各島で続けられている。女木島でも島の行事にこえび隊が参加している。こえび隊の行事参加が住民に感謝されていることが聞き取りでも分かった。「運動会にこえび隊が参加したり、文化祭に作品を出したりして」住民と交流し、「顔見知りになってあいさつを交わす」ことなどが、大いに喜ばれている。高齢者社会における精神的な「活性化」の形であろう。そのようなこえび隊の活動は彼らのホームページで紹介されている。

４．男木島

男木島の人口は195人（2011年）、過疎化と高齢化が著しく、女木島と男木島を合わせて高齢化率は60％を超えている（2009年）[29]。聞き取りによると「空き家率は男木島・女木島ともに50％程度」である。行政上は高松市に属し男木コミュニティセンター（公民館）がおかれている。「男木島は水が少ないため、自家消費用作物の畑はあるが水田はない。農業で生計を立てることはできないが、漁業を生業にする漁師が数人いる[30]」。

女木島には観光（夏の海水浴）があるが、男木島には仕事がなく、多くは高松へ仕事に出る。男木に住んで高松に通勤することは難しい。その一つの理由は、「高松と女木島・男木島を結ぶ船の高松発の最終便が午後６:10であり、さらに遅い便がないために、高松で残業があると島に帰れなくなる」からである。従って男木島は人口が流出し過疎化する一方である[31]。

男木島には平地がなく、民家が密集して斜面に張り付いた集落景観が島の特徴である。芸術祭の舞台になった７島の中では最も「島らしい」景観に恵まれている。男木の連合自治会は、「芸術祭を一過性のイベントに終わらせるのではなく、地域づくりに

役立てる方針を明確にして」積極的に協力をした。例えば「食事、トイレ、荷物置き場などの施設を用意して、来島客を迎えられるよう準備をした。高松市に協力を要請し、男木島の港に船の待合施設『男木島の魂』を芸術作品として設置することに成功した[32]」。さらに「作品を設置する空き家をアーティストに紹介したり、作品制作にも協力」をしたりした。そのような積極的な姿勢はアンケート調査の結果にも表れており、８項目の質問の内７項目において、男木島が４島の中ですべて最高の数字を示している。

このような積極的な対応には、過疎化高齢化が進む危機感や、男木島民の開放的な文化が背景にあると思われる。聞き取りによると、「その文化は伝統的なものであり、例えば昔は女木や高松など島外からさまざまな人びと[33]を島に受け入れてきた歴史が男木にはある」。「女木島と男木島は、それぞれの島が住民の閉鎖性と開放性という点で、対照的な文化的特徴がある」。「女木島で受け入れられなかった人が男木島に移り住み、生業を得て定住した」例が多くあるという。

アンケート調査の「島外の人々と交流することに関心が高まった」、「自分の島に対する愛着が強まった」、「芸術祭で知り合った人がいる」、「全体的に芸術祭が島に好ましい変化をもたらした」、「次回も自分の島で芸術祭を開催したい」などの５項目で、男木島は他の島に比べて顕著に高い数字を示している。芸術祭が男木島で高いインパクト効果を得た背景には、先述の男木島の開放的な文化の貢献が大きいと考えられる。

男木島の歴史上、前代未聞の非常に多くの芸術祭の観光客が訪れた。それに伴い島にとってプラスになることだけではなく、例えば「ゴミのポイ捨て、人々の騒音、迷って家の庭に入る観光客、住民の外出時に家にカギをかける不便、狭い道の大混雑、フェリーが満員で住民が乗れない」ことなど、男木住民にとって迷惑も多かった。民家が密集する居住区に作品が設置されたために、住民生活の支障になることは他の島よりも多かったはずである[34]。それにも係わらず男木にはポジティブな評価が高く、「次回も自分の島で芸術祭を開催したい」と回答したのである。

住民への聞き取りでは、「芸術祭で住民の心が豊かになった、大切なのは利益だけではない、以前は見過ごして感動しなかったものに目が向いて感動した」、「ふれ合いによって住民は人間的に変わったのではないか」との感想が述べられた。「心が豊かになった」そして「人間的に変わった」からこそ、大多数の住民が芸術祭の次回開催を希望したのであろう。芸術祭のプラス効果がマイナス影響を超克したといえるだろう。

男木島でも地域づくりの住民活動が行われている[35]。例えばふれ合い交流事業として男木島大運動会、男木島灯台の清掃、男木島と女木島が交替で行う夏祭り大祭、文化祭など、そして芸術祭後は男木交流館（港の「男木島の魂」）でのコンサートが行われ、こえび隊は他の島と同様にこれらの地域行事に参加している。さらに地域づくりの一つとして男木住民は「島の景色の良い場所を切り開いて周遊道を作っている」。お年寄りは「家にこもっている方が楽だが、道を作り草刈りをして、交流をしながら生活を楽しんでいる」。男木島の開放的な文化は生活の質への志向として表れているようである。

Ⅳ．芸術祭による地域づくりの課題

前章では４島それぞれの地域社会の特徴と瀬戸内国際芸術祭が地域に及ぼしたインパクトについて述べた。４島全体を見渡すと地域インパクトに関して共通の特徴が浮かび上がる。地域インパクトは、芸術祭を企画実施する主催者側に依る要因と、その企画を受けて芸術祭のために協力する島の住民側に依る要因があるものの、芸術祭主催者の企画実施の内容に起因することの方が多い。芸術祭のインパクト効果と地域づくりには、４島の事例を通していくつかの影響を与える要因のあることが判明した。それぞれの要因について以下に述べる。芸術祭は３年に一度のトリエンナーレ[36]として継続される予定であり、今後の芸術祭の発展や地域づくりの課題としても重要であろう。

１．ボランティアの活動

地域づくりのさまざまな要素として、こえび隊ボランティアの役割が大きい。すなわち地域の活気、島外の人々との交流、地域づくり活動、知り合いの増加、などに好ましいインパクトが生まれている。直島には美術館や家プロジェクトの作品が多かったので、こえび隊の活動はあまり見られなかったが、他の３島ではこえび隊の存在が地元の住民から歓迎

された。特に過疎化高齢化する地域社会において、若者と高齢者が交流することは、高齢者の生活の質の向上に繋がるし、ボランティアの若者にとっても同様であろう。島では急速に高齢化が進行しているために、住民が芸術祭を支えるのは、長期的には次第に難しくなることを考えると、ボランティアの役割がますます重要になる。

こえび隊は島の住民へのあいさつを徹底して心がけている[37]。「『島にこさせてもらっている』という気持を相手に伝えるきちんとしたあいさつ」を大切にしている（甘利 2011）。こえび隊のそのような態度に接して、住民は大いに好感を抱いている。そのような態度は地域の環境や人びとを尊重する姿勢の表れであり、観光客にも望まれる。その姿勢が観光客に広まれば、観光客のマナーは良くなり「次回も自分の島で芸術祭を開催したい」と思う住民が増えるだろう。

大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭のボランティア活動は、日本のボランティア文化の促進に貢献するものであり、若者が過疎高齢化地域に目を向ける機会の創出、高齢化地域の人びとの精神的な活性化、などにおいても望ましい。日本社会全体にとっても、社会変革を起こす文化的な活動あるいは運動として重要である。

２．島の文化

芸術祭の舞台になった島にはそれぞれの島特有の魅力がある。島の人びとが大切に思う自然や暮らしである。島は単に作品を設置するための場ではない。アーティスト達はそれぞれの島の歴史文化を反映するべく、サイトスペシフィックな作品を制作したはずである。しかし観光客は作品群を鑑賞しても、島の歴史文化に十分思いを巡らせるとは限らない[38]。従って芸術祭の主催者が作品のみを紹介するのは、客を受け容れた島の住民に対する敬意が不足しているように思われる。観光客に対する芸術祭主催者の案内が、作品群のみに限られている現状は、島の自然や暮らしや文化への「眼差し」に欠け、観光客と住民の相利的な条件は満たされない。

すなわち島の文化を尊重することは、訪問者が地域（住民）を尊重することであり、それは観光客のマナーの向上にも繋がるだろう。さらに大勢の観光客が原因で生じる不便が、住民の不満から島への誇りに多少とも変わる可能性もある。その結果、住民は「次回も自分の島で芸術祭を開催したい」と感じて、芸術祭が持続可能な催しになり、地域社会の活性化に繋がるだろう。このように観光客の眼差しは、地域に対するネガティブインパクトの軽減にも繋がり得ると思われる。

３．住民参加

芸術祭は来島者の混雑が激しかったために、島の道路が観光客で溢れて、住民の日常生活や生業に支障が生じることがあった。そのような経験から住民の間には作品鑑賞の巡回路に関する不満が生まれた。すなわち住民の日常生活や仕事に不都合が生じないように、作品を見て回る巡回路を設定する必要があったのである。そのためには作品の設置場所や巡回路に関して、地元住民の考えが反映されなければならない。地元のことは地元の人びとが最もよく知っている。住民の生活空間であるから当然である。

住民の考えを反映する方法は住民参加である。住民参加を実現するための現実的なプロセスは、設置場所や巡回路について、主催者の側から自治会や住民に諮ることであろう。住民に諮ることがすなわち地域の生活文化を尊重することになる。

その結果、住民の方では設置場所や巡回路について、住民間の利害調節が必要になるかも知れない。それをスムーズに行うためには地域住民のコミュニティが必要である。日常的な住民間のコミュニケーションがその利害調整に有効である。第Ⅱ章で紹介した大地の芸術祭のアンケート調査の表１にあるような、「作品制作作業などのために、地域内の人間関係に不和が生じた」というネガティブな結果は避けなければならない。有効な住民参加を地元社会が実現するためには、地域社会のまとまりすなわちコミュニティの力が問われるだろう。

４．観光客と地元住民の共存

観光客と地元住民の間にはポジティブとネガティブの関係がある。ポジティブの関係は室井のアンケート調査と筆者の聞き取り調査に基づいて、地域づくりのインパクト効果としてすでに前章で分析したとおりである。ネガティブの関係として以下の二つの課題について検討する。第一の課題は多くの観光客による混雑と、地元住民の日常生活との摩擦の緩和である。これは言わば物理的な課題である。第二の課題は観光客が地域の住民と文化に注ぐ「眼差

し」である。すなわち地域の自然と文化と人びとに対する関心や尊敬の念であり、言わば精神的な課題である。

第一の物理的な混雑は主に交通で生じる。本土と島を往復する船と島に入ってからの道路、飲食店などの生活関連施設、作品展示場の付近である。この混雑は観光客が最も多い直島で激しく現れたが、すべての島に共通する問題であった。芸術祭の主催者はこの問題の対策として、2013年の第２回瀬戸内国際芸術祭では、第１回のように夏期の集中開催ではなく、春・夏・秋に分けた開催がすでに計画されており、来客も分散することが期待されている[39]。混雑を緩和するための試行錯誤と斬新なアイデアが主催者側に必要であろう。混雑を避けるには、作品展示の方法について前述したように、さらに地元住民の参加も必要である。

より難しいのは第二の課題である。地元の歴史文化と自然と人びとに対する尊重や尊敬の念の重要性についてすでに本章で述べている。地元に対する尊敬は他者の空間に「お邪魔」する訪問者の当然の礼儀であるが[40]、観光客の関心は作品とその周辺の景観に偏りがちである。観光客は限られた時間にできるだけ多くの作品を見ようとするからである。

そのような状況の中で地元への眼差しを豊かにするには、例えば一つの島の作品数を制限すること、島の歴史文化の学習を入場の前提にすること、作品以外の訪問場所を紹介すること、などが考えられる。訪問客の眼差しが豊かになれば、地元の人びとに対する配慮が生まれ、礼儀やマナーもよくなる。結果的に訪問者も地元の人も気持よく共存できる。そして地元の人びとが３年ごとの芸術祭を心待ちにして、地域に客を迎える活気が生まれ、地域づくりに励むようになれば、芸術祭が一時的ではなく持続的な地域活性化イベントとして、定着するのではないかと思われる。

５．住民の雇用創出

職や仕事がないために島は過疎化している。企業城下町の直島は経済的には恵まれているが、過疎化については例外ではない。島から若い人口が流出するために、島は急速に超高齢化している。現在無償ボランティアのこえび隊が作品の制作・管理や観光客の案内に協力している。豊島では「島キッチン」で地元の住民が有償で働く場ができて喜ばれている。無償ボランティアの貢献が非常に大きいことは言うまでも無いが、無償ボランティアが活躍する場の他に、地元の住民が有償で働く適切な場が生まれると、経済効果として地元の住民に喜ばれるであろう。芸術祭が定着すれば民宿やカフェの開業が期待できる。これはすでに直島などで起きている。そうすれば島の若い人口が地元に留まり、島外から若い人口の流入が期待できる。高齢人口200人弱の島にとっては、たとえ数人でも若い人口の流入や子どもの声は島に活気や希望をもたらし、精神的な活性化が期待できる。

６．地域コミュニティの主体性

芸術祭による地域づくりとして主に主催者側に求められることをこれまでに述べた。主催者側が島の地域づくりを意図しても、地元に受け皿がなくては役に立たない。従って最後に住民側に求められることを述べる。島の住民にとって芸術祭は、単に制作や展示の場を提供したり、観光客を集めたりすることではない。芸術祭が島の地域づくりや人びとの生活の質の向上に繋がるような、住民自身の主体性が求められる。

第１回芸術祭で地域づくりに成功したのが男木島であり、連合自治会長の賢明なリーダーシップと住民の開放的な文化がそれを可能にした。第１回の芸術祭はすべての島にとって前代未聞の出来事であり、主催者の予測を超える多くの来島者に、地元住民が驚愕した105日間であった。今後も開催される芸術祭を地域づくりに取り込めるかどうかは、地域の住民団体の主体性とそれを支援する行政の姿勢に掛かっている。行政やボランティア団体はサポート役であり、主役は住民であり住民団体である。

高齢化社会の人びとの生活の質とはどのようなものか、それは行政ではなく当事者の住民自身にしか分からず、住民自身が創り上げるものだろう。芸術祭は住民自身の手で高齢化社会の一つのモデルを創る機会である。日本の高齢化社会の最先端を歩む離島が、芸術祭という島外の力を借りながら、高齢化社会のモデルを開発する機会である。その効果は瀬戸内海の島々のみに限定されない。過疎化高齢化する全国の多くの地域の中で、先駆的な地域づくりの課題に挑戦する重要な役割を担っている。

7．過疎高齢化する離島の将来

過疎化する離島の将来は不透明である。島から人口が流出する要因は多く、中でも大きな理由は島で生計を立てる産業がないことである。島の農業や漁業による生計は次第に難しくなった。過疎化による高齢化がこのまま進行するのだろうか。行政による住民支援は不可欠であるが、少なくとも島の人びとが孤独に陥らず、互いに仲良く助け合いながら暮らせることが生活の質には大切である。

企業城下町の直島でも人口が減少している現状を見ると、単純に産業の不在のみが過疎化の原因ではない。地域的な過疎・過密と全国的な人口減少が日本で同時進行している。住民の力のみで島の経済を活性化することは一般的には難しく思われる。しかし地域の人たちの生き方の選択により、島民が孤独に陥らず助け合う地域をつくることは可能であろう。瀬戸内国際芸術祭の事例は、地域外の人たちの応援で住民の交流を拡大して、新たな地域づくりをする可能性を示しているのではないかと思う[41]。

結論

アートプロジェクトが地域社会に及ぼすインパクトを事例に基づいて考察した。大地の芸術祭と瀬戸内国際芸術祭の先行研究を検討した結果、地域の話題や活気が生まれ、人びととの交流、地域づくり活動などが活発になる効果が確認された。地域づくりの効果は持続しなければならない。従って今後も継続的な調査研究が必要である。島外ボランティアや島外の人びととの交流が芸術祭後もそれぞれの島で続いている。他者との交流の促進・拡大は人の生き方であり、男木島のような地域の文化にも発展する可能性がある。

瀬戸内国際芸術祭が開催された島々の内、４島での聞き取り調査により、それぞれの島の固有性が大きく、地域インパクト効果の内容や程度も異なることが分かった。そして何れの地域においても、島外ボランティアの若者と地域住民の交流は地域の活性化に大きく寄与している。観光客やボランティアやアーティストとの交流は、地域住民の生活の質に貢献している。

地域インパクトにはポジティブインパクトがあるものの、ネガティブインパクトも存在する。前者を大きくして後者を小さくするには、芸術祭主催者の配慮と地元住民の積極的な参加が求められる。ネガティブインパクトの典型は住民生活を阻害する交通や生活施設の混雑である。また住民の生活領域に作品が設置されるので、住民の日常生活が侵害されないよう、観光客のマナーが大変重要である。本質的には訪問先の生活領域や文化を尊重する観光客の態度の問題であり、観光文化の進化が求められているのであろう。また地元住民が周りに見えない時、訪問客は無遠慮になりがちである。従って観光客のマナーの良否においても、住民と観光客の出会いは多少とも役割を果たす。観光客のマナーが良くなれば、客と住民の交流が促進され、それは双方にとってプラスになる。

このようにさまざまな局面において「交流」が要である。住民、アーティスト、ボランティア、観光客などの「交流」がプラスの効果を増幅する。特に高齢者の福祉や生活の質に貢献する、地域づくりの最大の課題が「交流」であろう。芸術祭やアートプロジェクトが地域に残せる最大の効果は「交流の文化」ではないだろうか。過疎高齢化社会における地域づくりの要は先ずは「交流の文化」の促進であろう。

芸術祭は今後も続けられるが、継続するに際して解決しなければならない課題も明らかになった。過疎高齢化地域の住民がさらに高齢化する中で、地元の人びとによる芸術祭への参加が次第に困難になるであろう。IターンやUターンの人びとが現れ、島外のボランティア参加がさらに増えることが望まれる。過疎高齢化地域における芸術祭の実験は、試行錯誤を伴いながらこれからも続けられる。

付記

本研究は平成23年度から平成26年度にわたる科学研究費補助金基盤研究C課題番号23530675による研究成果公表の一部である。

注

1　芸術祭は数多くの作品から構成されているが、一つ一つの作品制作過程がアートプロジェクトと位置づけられる。

2　瀬戸内国際芸術祭は、実行委員長は香川県知事、総合プロデューサーは福武總一郎氏、総合ディレクターは北

川フラム氏が務め、他に自治体、財団、経済団体、大学など多くの団体が実行委員会を構成して実施された。

3　「大地の芸術祭2000」、「ファーレ立川アートプロジェクト」、「養老天命反転地」、「札幌芸術の森」、「横浜トリエンナーレ2001」、「直島プロジェクト」、「福岡アジア美術トリエンナーレ2002」、「カフェ・イン・水戸」、「とかち国際現代アート展・デメーテル」の9件である。

4　アートプロジェクトではサイトスペシフィックな作品が求められる理由である。

5　助成団体にとってはまちづくりが目的であり、アーティストにとっては芸術表現が目的であり、他の住民やボランティアにもそれぞれの目的があり、各アクターの目的の実現がプラスサムの関係にある。

6　表１の「作品が設置されて良くなかったと感じているのは、どんなことですか」の質問については、10%、20%などと切りの良い数値が見られるが、どのような基準で数値が算出されたのか、出典の文献に記述されていない。厳密な数字を算出しにくい調査上の事情があったのかもしれない。

7　こへび隊は大地の芸術祭のボランティアグループであり、活動の内容は、来場者の案内役、ツアーガイド、イベント管理、作品のメインテナンス、こへび隊事務局などである。大学生を中心とした若いボランティアが、地元のサポーターとともに、平日の運営を支え、金曜日の夜は仕事を終えた社会人ボランティアも週末の運営に加わる。

8　四捨五入をしているので合計が100％にならない評価項目がある。

9　大地の芸術祭を支援する若者で構成されるボランティア集団である。

10　どのような方法でアンケート調査対象の住民が抽出されたのか詳細は不明である。

11　四捨五入をしているので合計が100％にならない項目がある。

12　古民家を改修・改築しながら空間そのものを作品化したもので、ベネッセホールディングスと株式会社直島文化財が運営している。

13　離島は海で囲まれていることから地域住民の一体感が強いのではないかと思われる。

14　2012年に開催される予定の「大地の芸術祭」を訪問し、観察することが必要であると考えている。

15　自然の成り行きとして話を聞いた相手は筆者が話しやすい男性に偏っている。

16　直島は8月6日、豊島は8月13日、女木島と男木島は8月14日、小豆島は8月15日に訪問した。さらに直島には11月20～21日にかけて訪問した。

17　直島町役場の担当課と芸術祭を支援する住民ボランティア（男性と女性）から聞き取りを行った。

18　1988年に福武書店社長の福武總一郎が直島町議会にて「直島文化村構想」を発表し、1992年にベネッセハウスと直島コンテンポラリーアートミュージアムをオープンした。

19　本村地区の住民が思い出を語り、その語り合いを通じて、地域の景観に意味を付与し、集合的な記憶が形成され、文化的景観の創造活動が行われた（宮本2008）。

20　「島キッチン」とは、豊島の野菜と魚を使った「豊島の食」により、人びとを繋ぐ意図で創られたレストランのプロジェクトである。

21　活気が一時的な現象に終わらないような地域づくりの工夫が必要であろう。

22　高松市の公式ホームページによる。2005年の女木島の高齢化率は57％であった。

23　女木島のアンケート回答者のうち年金生活者は73％であった（室井2011）。

24　島の小学生は高松のマンションに親と住んでいる。

25　女木地区コミュニティ協議会ウエブサイトに活動が紹介されている。

26　盆踊りの参加者などの女木住民から、自治会活動への押しつけ的な参加要求に対する不満の声が広く聞かれた。女木には親戚関係の小さなグループはあるものの、女木の全体を含む開放的なコミュニティの不在を指摘する声がある。「住民による島づくり活動が活発になった」回答の割合が他の島と比べて最小であることは、女木のコミュニティの不在を反映していると推察される。

27　現行の離島振興法は2013年3月末で期限切れを迎えることから、同法を10年間延長する改正法が2012年6月に「改正離島振興法」として成立した。改正法では「離島振興は国の責務」「離島の定住促進」という基本理念が新たに明記された。

28　住民から「活性化と言って何ようるん（何を言っているのか）」との率直な声が聞かれた。

29　2005年の男木島の高齢化率は61％であった。

30　男木島のアンケート回答者のうち年金生活者は50％であった（室井2011）。

31　残業が無い仕事の場合は高松に通っている住民もいる。

32　男木の連合自治会長が高松市にお百度参りのように陳情を重ねて、この待合施設を設置することに成功した。

女木島の港には待合施設の「おにの館」が設置されているが、男木島には高松市の投資が過去ほとんどされていなかった。

33　何らかの理由で女木や高松に住めなくなった人まで、男木は受け入れてきたとのことである。

34　筆者自身も作品が展示されていない民家の庭に迷って入りかけたことが何度かある。

35　男木地区コミュニティ協議会ウェブサイトに活動が紹介されている。

36　トリエンナーレとは３年に一度開かれる国際美術展覧会のことである。

37　北川フラム（2011）『瀬戸内国際芸術祭2010』には、芸術祭開催前から終了時までの「こえび日記」が掲載されている。

38　作品群は「島の豊かな風景に気づかせてくれた」と西田（2010）が評するように、多くの来訪者は作品と共に島の自然を賛美したと思われる。しかし船便の時刻に制約されながら、できるだけ多くの作品を見ようとする客は、作品以外の島の「宝」や文化に気づく余裕がないことも多いであろう。

39　次回の芸術祭では、開催する舞台をさらに香川県の西部の島々にも広げることが決定している。

40　本章の「ボランティアの活動」で触れたように、こえび隊は「『島にこさせてもらっている』という気持を相手に伝えるきちんとしたあいさつ」を大切にしており、それはまさに他者の生活領域を尊重する姿勢が表れているのである。

41　アートプロジェクトが地域住民の生き方（文化）に及ぼす影響をさらに調査したいと考えている。

参考文献

甘利彩子．2011．「こえび日記」、北川フラム『瀬戸内国際芸術祭2010』美術出版社.

岡市友利．2009a．「海と島の復権にむけて--瀬戸内国際芸術祭とさぬきの島々⑴」『瀬戸内海』(56)27-30.

岡市友利．2009b．「海と島の復権にむけて--瀬戸内国際芸術祭とさぬきの島々⑵小豆島、豊島」『瀬戸内海 』(57)25-29.

岡市友利．2009c．「海と島の復権にむけて--瀬戸内国際芸術祭とさぬきの島々⑶男木島、女木島、大島」『瀬戸内海 』(57)29-33.

勝村（松本）文子・吉川郷主・西前出・小林慎太郎．2008a．「芸術を用いた地域づくりにおける住民意識に関する要因の分析－大地の芸術祭　妻有トリエンナーレを事例として」『環境情報科学論文集』22.

勝村（松本）文子・田中鮎夢・吉川郷主・西前出・水野啓・小林慎太郎．2008b．「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因－大地の芸術祭　妻有トリエンナーレを事例として」『文化経済学』第６巻第１号.

加藤種男．2011．「企業メセナの評価」公益社団法人企業メセナ協議会編『アートプロジェクトを評価するために―評価の＜なぜ＞を徹底解明　評価ゼミレクチャーノート』.

北川フラム．2010a．『大地の芸術祭越後妻有アートトレエンアーレ2009』現代企画社.

北川フラム．2010b．「文化・芸術による地域づくり―越後妻有アートトレエンナアーレと瀬戸内国際芸術祭をめぐって」『地域社会学年報第22集』.

北川フラム．2011．『瀬戸内国際芸術祭2010』美術出版社.

公益社団法人企業メセナ協議会．2011．『アートプロジェクトを評価するために―評価の＜なぜ＞を徹底解明　評価ゼミレクチャーノート』公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室.

国土交通省．2007．『観光立国推進基本計画』.

中島正博・金谷信子．2012．「アートプロジェクトは地域にどのようなインパクトを与えたか？」日本ＮＰＯ学会第14回年次大会報告論文.

長畑実・枝廣可奈子．2010．「現代アートを活用した地域の再生・創造に関する研究－直島アートプロジェクトを事例として」『大学教育』第7号.

西田正憲．2011．「瀬戸内国際芸術祭2010における離島を巡るアートツーリズムに関する風景論的考察」『地域創造学研究』21⑶.

西田正憲．2008．「過疎地域の越後妻有と瀬戸内直島における現代アートの特質に関する風景論的考察」『ランドスケープ研究』71⑸.

野田邦弘．2011．「現代アートと地域再生－サイト・スペシフックな芸術活動による地域の変容－」『文化経済学』第８巻１号.

橋本敏子．1997．『地域の力とアートエネルギー』学庸書房.

八田典子．2004．「『アート・プロジェクト』が提起する芸術表現の今日的意義―近年の日本各地における事例に注目して―」『総合政策論叢』第7号.

松本文子・市田行信・水野啓・小林慎太郎．2005．

「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通したソーシャルキャピタルの形成」『環境情報科学論文集』19.
宮本結佳．2008．「集合的記憶の形成を通じた住民による文化景観創造活動の展開」『環境社会学研究』14.
室井研二．2011．『瀬戸内国際芸術祭の住民評価とその規定因』（報告書）.
室井研二．2012．「瀬戸内国際芸術祭の住民評価とその規定因」香川大学瀬戸内圏研究センター『瀬戸内観光と瀬戸内国際芸術祭』.